

講義コード	14D2320000
講義名称	経済情報処理論Ⅱ　＜秋＞
科目英文名	Management of Economic Information Systems Ⅱ
開講責任部署	経済学部　経済学科
代表ナンバリングコード	ECON1520
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 2 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
櫻井　雄大

授業形態	講義	実務経験のある教員による授業① Web開発業務の経験がある教員が、技術的な点も含めたIT活用について講義します。
------	----	---

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト
---------------	--

講義・演習概要	「経済情報処理論Ⅰ」と「経済情報処理論Ⅱ」は同一年度に履修することをお勧めします。ⅡではⅠで触れなかった内容を扱います。 この講義では、主に経済学部生が今後の学習/研究活動に応用できるように、情報処理の技術や背景などについて説明します。 経済学に限らず、今日では情報処理は私たちの生活に無くてはならないものとなっています。人々の様々な活動を記録し、大量のデータを素早く正確に処理し、そこから得られる知見を様々な分野で活用するにあたり、具体的な利用実例を示しながら説明するとともに、プログラミングの基本項目など技術的な項目も解説します。
学習（到達）目標	情報技術の基礎知識について学習し正しく理解することで、経済学およびその他社会科学の学習において情報技術を活用するための土台をつくり上げることを目標としています。

講義・演習計画

回	内容
第1回	復習—コンピュータの仕組み
第2回	論理演算の基本
第3回	学内の情報環境について
第4回	経済学におけるコンピュータの活用1(インターネット資源の調査と利用)
第5回	経済学におけるコンピュータの活用2(データの統計処理)
第6回	経済学におけるコンピュータの活用3(シミュレーション)
第7回	経済学におけるコンピュータの活用4(数値解析)
第8回	経済学におけるコンピュータの活用5(データマイニング)
第9回	経済学におけるコンピュータの活用6(複雑系)
第10回	プログラミング詳説1(プログラムが扱うデータの概念、型と構造)
第11回	プログラミング詳説2(流れの制御—条件分岐と反復処理)
第12回	プログラミング詳説3(処理の部品化—関数とライブラリ)
第13回	プログラミング詳説4(現実とプログラムのマッパー—アルゴリズムの選択と設計)
第14回	プログラミング詳説5(制御と計測)
第15回	これまでの講義まとめ、最終試験

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	100%
レポート	0%
その他	0%

成績評価の方法（コメント）	備考 不定期に実施する小テスト及び期末試験の成績により評価します。
---------------	--------------------------------------

参考文献	「入門コンピューター科学 ITを支える技術と理論の基礎知識」 J.Glenn Brookshear（著），神林 靖（翻訳），長尾 高弘（翻訳） 株式会社 KADOKAWA,2017 ISBN-13:978-4048930543
事前および事後学習の指示	準備学習が必要な項目については、講義中に適宜指示します。 また、必ずノートを取り、それを参考に講義中に話した項目について調べなおすことで復習してください。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	情報,コンピュータ,Web,プログラミング,データベース,アルゴリズム
備考(管理者用)	(旧：経済情報処理論) 02～10E・CBCC生読替

講義コード	1560040000
講義名称	国際機構論B　＜秋＞
科目英文名	Studies of International Organizations B
開講責任部署	法学部　法律学科
代表ナンバリングコード	POLS2430
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 2 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
軽部　恵子

授業形態	講義	アクティブラーニング
------	----	------------

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 コメントシート
---------------	---

講義・演習概要	この科目では、国連の仕組みについて学びます。具体的には、国連憲章の重要条文、国連の6つの主要機関、とくに安保理を事例とともに学んでいきます。国際機構論の理解には、国際紛争の背景となる世界史、とくに近現代史の知識が不可欠です。受講生は、参考文献を用いて、自分の世界史の知識を確認し、必要であれば自習してください。授業で取り上げるのは、高校の教科書に掲載されていること、および就職試験の筆記試験で問われることです。講義冒頭に、国内外のメディアのホームページを用いて、国際機構論の視点からニュースを解説します。受講生は、メディアを批判的に読み解く「メディア・リテラシー」を学んでください。
学習（到達）目標	①国連の主要機関とその権限・任務について学ぶ。 ②国連の取組と成果、問題点について、安全保障を中心に考察する。 ③国際問題の理解に必要な一般教養、とくに歴史・地理・文化・宗教に関する基礎知識を獲得する。 ④メディア・リテラシーを身につける。

講義・演習計画

回	内容
第1回	第二次世界大戦と国連の設立
第2回	国連憲章（1）目的
第3回	国連憲章（2）原則
第4回	総会
第5回	事務総長
第6回	安保理（1）任務と権限
第7回	安保理（2）朝鮮戦争
第8回	安保理（3）スエズ戦争とPKO
第9回	安保理（4）湾岸戦争
第10回	安保理（5）冷戦終結後の民族紛争
第11回	安保理（6）アメリカ同時多発テロとイラク戦争
第12回	安保理（7）ロシアのウクライナ軍事侵攻
第13回	安保理（8）イスラエルと中東危機
第14回	核軍縮
第15回	まとめ、期末試験

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	100%
レポート	0%
その他	0%

成績評価の方法（コメント）	計3回の試験のみで成績評価を行います（試験は授業時間中に実施し、事前に日程を発表しない）。出席は成績評価に全く関係ありませんが、出席しない人に単位修得は困難です。成績が振るわなかった受講生のために、追加の試験やレポートを課すことは一切ありません。詳細は第1回授業資料を読んでください。
---------------	--

テキスト

	著者	タイトル	教科書購入区分	ISBN	出版社	備考
1.		なし				

参考文献	植木安弘『国際連合：その役割と機能』（日本評論社、2018） 篠原初枝『国際連盟』（中公新書、2010） 最上敏樹『国連とアメリカ』（岩波新書、2005） 廣田尚久・上杉勇司『和平学入門：戦争を止める13の法則』（筑摩選書、2025） 上杉勇司『紛争地の歩き方』（ちくま新書、2023） 青野利彦『冷戦史』全2巻（中公新書、2023） 笈川博一『物語エルサレムの歴史』（中公新書、2010） 鶴見太郎『ユダヤ人の歴史：古代の興亡から離散、ホロコースト、シオニズムまで』（中公新書、2025） 鶴見太郎『シオニズム：イスラエルと現代世界』（岩波新書、2025） 鈴木啓之・児玉恵美編著『パレスチナ／イスラエルの〈いま〉を知るための24章』（明石書店、2024） 高橋正男『物語イスラエルの歴史:アブラハムから中東戦争まで』（中公新書、2008） 黒川祐次『物語ウクライナの歴史』（中公新書、2002） 服部倫卓・原田義也編著『ウクライナを知るための65章』明石書店（2018） 特別公開 https://www.akashi.co.jp/news/n47213.html 小林義久『国連安保理とウクライナ侵攻』（ちくま新書、2022） 田中久美子監修『理由がわかればもっと面白い！西洋絵画の教科書』（ナツメ社、2021）
事前および事後学習の指示	毎回の授業で指示される参考文献や参考URLをもとに、事前および事後学習をしてください。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	国際機構、世界史、国際連盟、国連、欧州連合（EU）、北大西洋条約機構（NATO）
備考(管理者用)	（旧：国際機構論）02～19E・SS・SW・B・L・J生読替

講義コード	1580320000
講義名称	コミュニケーション論[2]　＜秋＞
科目英文名	Communications
開講責任部署	社会学部　社会学科
代表ナンバリングコード	COMM2400
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 2 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
長崎　励朗

授業形態	講義	アクティブラーニング
------	----	------------

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 コメントシート
---------------	---

講義・演習概要	一般に「コミュニケーション」と言えば、人間同士のパーソナルな会話が想起される。そのため、メディアを介した「マス・コミュニケーション」とは別に語られがちである。しかし、本来これらは別個のものではない。コミュニケーションとは、ある主体が別の主体に情報を伝達する行為の全てを含むものだ。そのため、コミュニケーション研究はメディア論のみならず、社会心理学や文化人類学など複数の分野にまたがって展開されている。本講義ではこれらの知見を分野横断的に論じることで、「コミュニケーション」を捉える多角的な視点を提供する。
学習（到達）目標	コミュニケーションに関する幅広い知識を身につけることを通じて、一般に言われる「コミュニケーション能力」などの言葉に流されない自分なりのコミュニケーション観を構築してほしい。

講義・演習計画

回	内容
第1回	ガイダンス
第2回	コミュニケーションとマス・コミュニケーション
第3回	コミュニケーション研究の系譜（１）－強力効果論と限定効果論
第4回	コミュニケーション研究の系譜（２）－新強力効果論
第5回	文字の文化と声の文化－日本型コミュニケーションとは何か？
第6回	AIとコミュニケーション（１）－フィードバックと予言の自己成就
第7回	AIとコミュニケーション（２）－人工知能とビッグデータ
第8回	非言語的コミュニケーション
第9回	社会学者たちのコミュニケーション論
第10回	市民的公共圏は存立可能か？
第11回	ハンナ・アーレントの公共圏論
第12回	インターネット公共圏論
第13回	民主主義とコミュニケーション（１）右翼と左翼
第14回	民主主義とコミュニケーション（２）ヨロンとセロン
第15回	まとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	90%
レポート	
その他	10%

成績評価の方法（コメント）	主に最後の授業で実施するテストで合否を判断する。
---------------	--------------------------

参考文献	・田崎 篤郎・児島 和人『マス・コミュニケーション効果研究の展開』、北樹出版 ・佐藤卓己『現代メディア史』、岩波書店
事前および事後学習の指示	試験前にはノートを見直すことをおすすめします。 また、日常的には、授業の内容を踏まえて自身の周囲にあるものを観察してみること。
学習時間	事前学習時間：30時間　事後学習時間：30時間
備考(管理者用)	(旧：コミュニケーション論) 02～18生読替

講義コード	1755610000
講義名称	文字・表記論　＜秋＞
科目英文名	Japanese Writing System and Orthography
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	LING3490
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 2 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
島　千尋

授業形態	講義 アクティブラーニング 実務経験のある教員による授業① 日本語学校・専門学校・他大学での日本語教師経験のある現役日本語教師が経験の中で得た具体的な実例を交えつつ講義する
------	---

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト
---------------	--

講義・演習概要	日本語の「文字」（ひらがな・カタカナ・漢字）およびそれにローマ字や記号を含めた「表記」（書き方）に関して、外国人の目から見た特徴や「日本語を教える」という観点から必要になる知識や技術について講義します。 将来、日本語教師として外国人学習者に日本語を教えてみたい人はもちろん、日本語のことをもっと深く知りたい人、今後社会で必ず関わることになる外国人と接する際に必要な知識を今から身につけておきたい人とする授業です。 （講義全体を通して、文化庁「日本語教師養成における必須の教育内容50項目」のうち（41）日本語教育のための文字と表記　について学びます）
学習（到達）目標	日本語学習者に日本語を教える際、また周りの外国人と接する際に、日本語の「文字」および「表記」に関して必要となる以下の2つを身につける。 ①自分自身が日本語のひらがな・カタカナ・漢字およびローマ字・記号を正確に読め、また書き表せること ②日本語学習者や身近な外国人に上記を効果的に教えられること

講義・演習計画

回	内 容
第1回	（1）かな　一ひらがな①一　～ひらがなの言葉の正確な表記～ （文化庁「日本語教師養成における必須の教育内容50項目」のうち（5）言語政策　（9）言語政策とことば　を含む）
第2回	（1）かな　一ひらがな②一　～ひらがなについて知っておくべき知識～
第3回	（1）かな　一ひらがな③一　～日本語学習者にとってのひらがなの難しさおよびひらがなの教え方～
第4回	（1）かな　一カタカナ①一　～カタカナの言葉の正確な表記～ （文化庁「日本語教師養成における必須の教育内容50項目」のうち（5）言語政策　（9）言語政策とことば　を含む）
第5回	（1）かな　一カタカナ②一　～カタカナについて知っておくべき知識～
第6回	（1）かな　一カタカナ③一　～日本語学習者にとってのカタカナの難しさおよびカタカナの教え方～
第7回	（2）漢字　一読み方①一　～漢字の言葉の正確な読み方～ （文化庁「日本語教師養成における必須の教育内容50項目」のうち（5）言語政策　（9）言語政策とことば　を含む）
第8回	（2）漢字　一読み方②一　～漢字の読み方について知っておくべき知識～
第9回	（2）漢字　一読み方③一　～日本語学習者にとっての漢字の読み方の難しさ～
第10回	（2）漢字　一書き方①一　～漢字の言葉の正確な書き方～ （文化庁「日本語教師養成における必須の教育内容50項目」のうち（5）言語政策　（9）言語政策とことば　を含む）
第11回	（2）漢字　一書き方②一　～漢字の書き方について知っておくべき知識①～
第12回	（2）漢字　一書き方③一　～漢字の書き方について知っておくべき知識②～
第13回	（2）漢字　一書き方④一　～日本語学習者にとっての漢字の書き方の難しさ・漢字の教え方～

第14回	(3) ローマ字 (文化庁「日本語教師養成における必須の教育内容50項目」のうち(5) 言語政策 (9) 言語政策とことば を含む)
第15回	(4) 文章の表記 (文化庁「日本語教師養成における必須の教育内容50項目」のうち(5) 言語政策 (9) 言語政策とことば を含む)

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	
レポート	80%
その他	20%

成績評価の方法（コメント）	・出席は取りませんが、その日の授業内容に基づいて、ほぼ毎回小テストを出します。授業資料をM-Portに上げるのは小テストの提出期限後ですので、授業を聞いていないと小テストができません。授業には毎回必ず出席してください。もちろん、ただ出席しているだけで出席点が加味されるということはありません。 ・周りの人とおしゃべりをする、断りなく途中退室することは厳禁とします。どうしても退室しなければならない場合は、講義中でも構いませんので教員の許可を取ってください。 ・交通機関遅延などによる遅刻を除き、授業開始45分後以降は入室できないものとします。連絡がない限り教室には入れませんので十分注意してください。 ・「レポート」は学期中に時々課す課題（全3回（40％））と学期末に課す最終課題（40％）です。 ・「その他」はほぼ毎回課す小テスト（20％）です。 ・授業中に質問への解答のためにスマートフォンを使用してもらう場合があります。
---------------	---

事前および事後学習の指示	・授業資料（パワーポイント）をM-Portに上げますので、それを見て復習してください。 ・自分自身や身の回りの日本語の表記の正確さについて普段から強く意識するようにしてください。 ・学内の留学生と積極的に関わり、話をして、彼らが日本語について感じていることを直接聞いてみてください。 ・外国人学習者向けの様々な日本語教科書が図書館にあるので、文字や表記に注意をしながら見てください。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
キーワード	日本語、日本語教育、文字、表記、漢字、ひらがなカタカナ

<社会人の方へ>授業内でQRコードを読みこんでGoogleフォームで答えていただくため、スマートフォンの使用をお願いする場合があります。

講義コード	17E0530000
講義名称	英語の文法B　＜秋＞
科目英文名	English Grammar B
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	LING3410
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 2 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
森下　裕三

授業形態	講義
------	----

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト 宿題(演習問題、e-learning等)
---------------	--

講義・演習概要	この授業では、英語の文法を実際にどのように使われているかという観点から考えます。英語の文法を、例外の多い規則の集まりとして捉えるのではなく、使用頻度・分布・慣用といった要素によって形づくられてきたものとして理解することを目的とします。授業では、必要に応じて日本語など他言語との比較をおこないながら、英語の文法がどのように選択され、偏りをもち、変化してきたのかを具体例を通して検討します。専門用語の暗記や基礎的な英文法の復習は目的とせず、英語の文法を使われ方から説明する視点を身につけることを目指します。
学習（到達）目標	この授業を通して、受講者は次のことができるようになることを目標とします。 1. 英語の文法的な形が、使用頻度や慣用性とどのように結びついているかを説明できるようになる 2. 規則的か規則的でないかに分けられやすい文法現象を、使用の偏りや歴史的背景から捉え直せるようになる 3. コーパス的な視点をういて、英語の文法にみられる分布の偏りや傾向を説明できるようになる 4. 英語の文法を、正しいか正しくないかといったことではなく、なぜその形が選ばれやすいのかという観点から考えられるようになる

講義・演習計画

回	内容
第1回	オリエンテーション：英語の文法を「使用」からみる - 規則中心の文法観からの転換 - 用法基盤モデルとは何か
第2回	頻度と文法①：よく使われる形が基本になる - 高頻度形式の定着 - 「例外」が残る理由
第3回	頻度と文法②：規則変化と不規則変化 - 規則変化動詞／不規則変化動詞 - なぜ不規則が消えないのか
第4回	分布の偏り①：文法形式はどこで使われるか - 書き言葉／話し言葉 - 場面と文法
第5回	分布の偏り②：語彙と文法の結びつき - 特定の語と特定の形 - 文法と語法の境界
第6回	文法化①：語から文法へ - 使われ方の固定化 - 頻度と再分析
第7回	文法化②：意味の薄まりと機能の強化 - なぜ文法要素は抽象的になるのか

第8回	さまざまな英語：変種と文法 - 地域差・社会差 - 標準英語はどこから来るか
第9回	使用域と文法選択 - フォーマル／インフォーマル - 書きことばと話しことば
第10回	獲得と文法①：動詞中心の初期パターン - Tomasello の verb-island hypothesis - 子どもは「文法」ではなく「使えるまとまり」から始める
第11回	獲得と文法②：局所的使用から一般化へ - 動詞ごとのパターンがどう広がるか
第12回	情報構造①：名詞句の使用傾向 - 冠詞・限定表現 - 出現しやすい環境と出現しにくい環境
第13回	情報構造②：情報と使用 - 新情報／旧情報 - 選ばれやすい形
第14回	会話における文法パターン - 省略・定型表現 - 相互行為としての文法
第15回	文法はどこまで一般化されているか - 語彙依存性と抽象性のバランス - 英語文法を使用の集積として捉え直す

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	50%
レポート	
その他	50%

成績評価の方法（コメント）	1. 初回を除く毎回の授業で、その日の授業内容の理解度を確認するために、実際に語の意味を分析してもらう小テストを実施します。 2. 初回を除く毎回の授業で、授業で扱った概念や用語について、その日の授業内容の理解度を確認するための授業課題が与えられます。
---------------	---

参考文献	早瀬尚子・堀田優子 (2005) 『認知文法の新展開』, 研究社. 石川慎一郎 (2021) 『ベーシックコーパス言語学』, ひつじ書房. 崎田智子・岡本雅史 (2010) 『言語運用のダイナミズム』, 研究社.
事前および事後学習の指示	授業課題は、授業の内容と課題についてよく理解した上で取り組む必要があります。授業内容は録画し、授業翌日までに M-Port より視聴可能な URL を掲出しますので。十分に復習した上で課題に取り組んでください。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
備考(管理者用)	(旧：英語の文法) 08～17L生読替☆ (旧：統語論) 02～07L生読替

講義コード	17F6100000
講義名称	メディア文化特論-マルチメディア文化の実践　＜秋＞
科目英文名	Media and Culture-Multimedia Social Practice
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	FMED3430
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 2 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
有國　明弘

授業形態	講義
------	----

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 コメントシート
---------------	---

講義・演習概要	スマートフォンの持ち歩きが常態化する中で複数のメディア様式を融合したマルチメディアはより身近になり、多くの新しいメディア文化を生み出してきた。日常の中で無意識に生み出されるものもあれば、地域経済の活性化や音楽イベントの開催など明確な意図を持った取り組みとして試みられてきたものもある。本授業では、そうした意図的な試みを「創造的な文化実践」と位置付け、講義していく。創造的なマルチメディア文化実践は、国や地域行政が戦略的に取り組んだり、アーティストがプロモーションとして手がけたり、市民が公共の福祉のために行ったり多様に展開されてきた。また、社会で展開される文化実践の知識を持つだけでなく、受講者自身のメディアリテラシーを高めることを目的とする。
学習（到達）目標	(1) 創造的な文化実践とは何か、理解を深め、自分の言葉で説明できる。 (2) 社会で取り組まれているマルチメディア文化実践について検証し、評価できる。 (3) マルチメディアの創造的な活用について、独自のアイディアが出せる。

講義・演習計画

回	内容
第1回	オリエンテーション
第2回	映画-構造分析で物語の背後にあるものを読み解く
第3回	私たちはテレビドラマをどのように受け取っているか-オーディエンス論
第4回	ポピュラーミュージック①（ロックミュージックと象徴闘争）
第5回	ポピュラーミュージック②（ヒップホップの「経路」）
第6回	「モノ消費」から「コト消費」へ-DJの「現場」実践
第7回	ソフト・パワー論としてのアニメ
第8回	文化産業論でマンガを読み解く
第9回	アニメ・マンガと社会
第10回	グローバルの中の個としてのストリートファッション
第11回	部活動の中のストリートダンス実践
第12回	「クールジャパン」とオリエンタリズム
第13回	フレーミングを操作する「お笑い」・「お笑い」の本質とは何か
第14回	ソーシャルゲームの「ソーシャル」とは？
第15回	まとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	0%
レポート	
その他	100%

成績評価の方法（コメント）	300字以上で記述してもらおう授業課題を毎回出題し、その課題100%で成績評価する。
---------------	--

参考文献	田中東子編著（2021）『ガールズ・メディア・スタディーズ』北樹出版 石田佐恵子・岡井崇之編（2020）『基礎ゼミ　メディアスタディーズ』世界思想社 飯田豊・立石祥子編（2017）『現代メディア・イベント論』勁草書房 遠藤英樹・堀野正人・寺岡伸悟編（2014）『観光メディア論』ナカニシヤ出版 遠藤英樹（2011）『現代文化論』ミネルヴァ書房
事前および事後学習の指示	事前学習として該当するテキストを読んで疑問点などまとめておくこと。事後学習として作業課題に取り組み、自身の日常的なメディア実践と結び付け考えを掘り下げること。
学習時間	事前学習時間：30時間　事後学習時間：30時間

講義コード	17F7030000
講義名称	映像メディア論B　＜秋＞
科目英文名	Visual Media B
開講責任部署	国際教養学部　英語・国際文化学科
代表ナンバリングコード	FMED2420
単位数	2.0
時間割	秋学期: 金曜日 2 時限
講義開講時期	秋学期

担当教員

氏名
森田　良成

授業形態	講義	アクティブラーニング
------	----	------------

アクティブラーニングの詳細	※受講人数により表記のとおり実施できない場合があります。 小レポート/小テスト
---------------	--

講義・演習概要	今日においてはこれまでの時代にはなかった規模や速度、表現方法によって、様々な映像が撮影・制作され、鑑賞され、消費されている。このような状況において、いかに「他者」や「異文化」を描くかという問題は、集団的なものから個人的なもの、政治的な関心から娯楽に関わるものまで、様々な文脈において改めて重要になっている。 この講義では、それぞれの目的と背景のもとで制作された、私たちにための「異文化」「他者」が描かれた映像作品を取り上げる。文化人類学の議論を参照しながら、特にドキュメンタリー作品を取り上げて映像メディアの可能性と危険性を学ぶ。
学習（到達）目標	映像メディアを多角的に検討し、その特性を学ぶ。 映像メディアが「異文化」をどのように描きうるのかについて理解を深める。

講義・演習計画

回	内容
第1回	イントロダクション
第2回	映像とテクノロジー(1)
第3回	映像とテクノロジー(2)
第4回	映像とテクノロジー(3)
第5回	家族・友人を撮る(1)
第6回	家族・友人を撮る(2)
第7回	家族・友人を撮る(3)
第8回	民族誌映画から見る異文化の風景(1)
第9回	民族誌映画から見る異文化の風景(2)
第10回	民族誌映画から見る異文化の風景(3)
第11回	他者をどのように描くのか(1)
第12回	他者をどのように描くのか(2)
第13回	他者をどのように描くのか(3)
第14回	他者をどのように描くのか(4)
第15回	まとめ

成績評価の方法（割合）

「成績評価の方法（コメント）」についても合わせてご確認ください。

試験	0%
レポート	60%
その他	40%

成績評価の方法（コメント）	[その他40%] 平常点を評価するために、小レポート等を複数回実施する。提出回数だけではなく、記述内容、すなわち「授業内容を理解したうえで自分の考えを論理的に記述できるかどうか」を評価する。 *受講者数によるが、一定の条件のもとで映像を撮影して提出してもらい、それをもとに議論することを予定している（技術的に難しくはない、簡単な撮影）。 [レポート60%] 1000字程度を予定。小レポートと同じく、「授業内容を理解したうえで自分の考えを論理的に記述できるかどうか」を評価する。 出題・作文の条件・評価基準などについて、授業内で詳しく説明する。
---------------	--

参考文献	村尾静二、久保正敏、箭内匡・編（2014） 『映像人類学(シネ・アンソロポロジー)—人類学の新たな実践へ』セリカ書房 エリック・バーナウ（2015） 『ドキュメンタリー映画史』筑摩書房 ほか、授業において指示する。
事前および事後学習の指示	講義中に紹介する文献資料を読み、資料映像を視聴すること。 課題に積極的に取り組むこと。
学習時間	事前学習時間：30時間 事後学習時間：30時間
備考(管理者用)	（旧：映像メディア論）10～17SS・08～17L生読替☆（旧：社会学特講－映像メディア論）02～09SS生読替☆（旧：比較文化研究－映像メディア）02～07L生読替